

紹介

朝治啓三・江川温・佐藤彰一・
服部良久・早川良弥編著

『西欧中世史』〔上〕

〔中〕〔下〕

この上中下三巻からなる『西欧中世史』は、題名からも伺われるように概説書として分類されるであろう書物である。しかしそれは現在までに我が国で刊行された西欧中世史の概説書とは明確に一線を画した、言うなれば新しい形の概説書となるべくして編纂された書物なのである。従来の西欧中世史関係の書物は、およそ純粹に専門的な研究書か、初学者を対象とした往々にして簡潔に過ぎるきらいのある概説書かのどちらかに類別することができた。そして中世史初学者は、概説と専門研究の隔たりに困惑させられてきた。それゆえ学界においては、初学者と専門的研究者の間隙を埋め、すなわちより専門的な内容を持ち研究者の用になかなう概説書が必要とされるようにな

ってきたのである。本書は巻頭の「はしがき」において述べられているように、西欧中世史に関して「高校までの歴史教育を通じて得られる基礎知識と専門研究との間に橋渡しをする」ために編まれたものであり、まさにそうした学界の要請に応える形となっているというわけである。本書の構成は三巻で中世をおおまかに前期中期後期と分け、巻毎にその扱う時代の「概説」が巻頭に置かれ、それぞれの筆者が執筆を担当する章が九本（下巻は十本）それに続くというものになっており、また各巻末の一本は西欧における「辺境史」として位置づけられる内容である。ここで本書を際立たせているといえるのが、各巻の各章がそれぞれ様々な分野の中世史研究者によって執筆されているという点である。それぞれの章は各執筆者の専門領域に関するものであり、内容も決して概説にとどまっていはいない、専門的なものとなっているのである。

それでは早速内容の紹介に入りたい。上巻は『継承と創造』と題されており、それはそのまま概説の章題になっている。そしてその概説では、五世紀から十世紀にいたるローマの継承と西欧キリスト教社会の創

造の歴史が、キリスト教の社会への関わりという視点から簡潔かつ多角的に述べられている。

続く第一章は、佐藤彰一「聖人とキリスト教的心性の誕生」である。四世紀以降キリスト教的心性は禁欲への志向を強め、またその実践者としての聖人に対する崇敬が興ったのであるが、五・六世紀の貴族司教の聖人化は、ガリアにおける「禁欲」思想に変化をもたらし、それが七世紀のコンバスの革新につながっていると説く。

岡地稔「ゲルマン部族王権の成立——東ゴート族の場合——」においては、東ゴート王テオドリックの三度の王位推戴の考察を通じて、彼の王権が「王家的部族王権」を基礎においた「軍隊王権」として成立したものであり、さらにそれはローマ的権力により強化されたであろうことが示されている。

森義信「政治支配と人的紐帯」は、メロヴィング王権の成立からカロリング王家の断絶までを概観しつつ、フランク王国における王権やその法制度、軍事制度などを検討し、それがローマ的政治システムの残滓の上に構築されたゲルマン的な人的ネット

ワークを基盤とすることを示す。

小田内隆「キリスト教と俗人教化」は、中世における聖職者文化と民俗文化の共存を示す。そして王権と結びついたカロリング期の教会改革における俗人の教化の状況を、貴族層と民俗文化を保持する民衆層のそれぞれについて検討を加え、そこに宗教生活のルーティン化を見ている。

カロリング期のブリュム修道院領の所領明細帳という史料に丹念な検討を加えているのが、森本芳樹「所領における生産・流通・支配」である。本章においては、古典学説の批判と古典荘園制の再評価の研究史をふまえつつ、古典荘園制に基づく中世都市＝農村関係の所領明細帳を利用したの再検討が行われている。

丹下栄「西欧中世初期社会の流通機構——パリ周辺地域を中心に——」は、カロリング期パリ地域の流通活動の構造が、ローマ世界の遺産を受容しつつ銀貨の普及や北海・バルト海交易の発達に見られる独自性を備えた重層的なものであったことを示し、ピレンヌの中世初期像を批判している。

早川良弥「社会的結合」は、中世史研究において重要な課題であるという人的集団

についての考察である。ここでは中世初期の集団についての史料である「盟約者名簿」を作成した祈禱兄弟盟約について、また特に貴族家の親族集団、中世初期のギルドをとりあげ、それぞれについて内的構造を概観している。

佐藤彰一「識字文化・言語・コミュニケーション」では、中世初期の話し言葉は書き言葉たるラテン語と二重言語化はしたものの発音においては同一性を保っていたが、カロリング・ルネサンスにおけるラテン語の古典的規範への復帰によって、そこに決定的な分化が生じたということが説かれている。

熊野聰「北欧の世界」では、北欧の貧しい土壌と豊かな水系のもと散居定住し、農耕ばかりか漁や交易に従事した自ら武装した独立自営農民の姿が示されており、また北欧における特殊な大土地所有と「貴族」身分の形成、北欧の王権が選挙王制であり身分制議會に農民が参加したことが述べられている。

続く中巻の副題は『成長と飽和』である。巻頭の概説は本書の取り扱っている時代、すなわち十一世紀から十三世紀を、副題に

よって示されているように、農業生産力の増大と人口の増加により飽和化した西欧社会の拡大期としてとらえ、その時代の様々な側面に言及している。

山辺規子「ローマ・カトリック秩序の確立」は、いわゆる「叙任権闘争」についての通説を、時間的空間的に限定され理念化されたものであるとし、ローマ教皇庁の組織化、教会の多様化、司教座と教区制度の整備の三点を検討することで、ローマ・カトリック教会の秩序の形成を考察する。

十一—十三世紀における国家統合の進展に関して、制度と権力構造の観点から考察を加えているのが、服部良久「地域と国家統合」である。ここでは叙任権闘争以前とシュタウフェン朝期のドイツ、フランス、およびイングランドについてのそれぞれ個別の検討によって、その地方行政面における特色が描き出されている。

江川温「貴族・家人・騎士」においては、十一—十二世紀のフランスおよびドイツ地域における「貴族」という階級の動向を社会構造の変動の中に位置づけるために、まず貴族階級内の諸集団とその「貴族性」、騎士理念の貴族による受容が検討され、また

家人層の社会的上昇による貴族身分の再編成が示される。

中世都市の南北類型論に批判を加えているのが、城戸照子「インカステラメント・集村化・都市」である。本章では、防備集落創設を中心とする集村化（インカステラメント）が、南欧に限らず全欧的な動きであったことが示され、さらにその動きの中での都市と農村のネットワークの形成が、ラティウム教皇国家を例として詳述されている。

山田雅彦「市と交易」は、中世初期以来の「市」が十世紀以降徐々に国王や諸侯の権力下に組み込まれ、また一方で交易の量的拡大と市場依存性の増加がみられ、そこにおいて年市の集合体としての大市が発達したことを示す。しかしまた市場経済の蔓延は、定期市そのものを商品取引から遠ざけていったとする。

十一—十三世紀の領主・農民関係は、渡辺節夫「領主と農民」において示される。ここでは、領主支配と村落共同体の内的連関、領主の農民支配における経済的要素と経済的要素の連関、農奴制確立過程と身分制の関係に着目することにより、ライン・

ロワール間地域における農奴制確立の過程と諸条件の検討が行われている。

大嶋誠「知識と社会——大学の成立と教皇の介入を中心として——」は、「十二世紀ルネサンス」における「知的覚醒」としての学校制度の再編整備を考察し、パリ大学の成立およびローマ教皇庁による大学の介入が、新たな知的世界の西方ラテン教会への取り込みを目的としたものであったことを示す。

池上俊一「キリスト教と民衆的想像世界」は、まず民衆的想像世界についての諸見解を概観し、民衆的想像世界を示す例として「異界描写」と「魔女の夜間飛行」を取り上げ、そこにおける民衆的なものから全西欧的なものへの変容を述べ、その変容の盛期中世における社会的要因を検討する。

中巻における「辺境史」に位置づけられるのが、尾崎明夫「レコンキスタとイベリア半島」である。本章においては十一世紀から十三世紀のレコンキスタ史が、主としてカステイリヤとアラゴンの政治史を通じて編年的に概観されており、複雑なレコンキスタの推移が極めて明快に示されている。また、中世盛期のスペイン文化につい

ても項が割かれている。

下巻は「危機と再編」と題されている。その概説においては、いわゆる十四世紀の「危機」としての農業危機と封建危機、その後の「再編」、すなわち国家的統合の進展や普遍的権威の衰退、さらに中世末期の文化について、十四・十五世紀という中世の末期の時代が多様な研究成果の紹介検討にもとづいて詳述されている。

樺山紘一「キリスト教会と教皇権の動揺」は、中世キリスト教会がその最盛期に保持していた力の源泉が、アヴィニョン時代から大分裂を経て公会議時代へという教会史の流れの中で、いかなる状況に至ったかを見ている。しかし結びにおいては、それが衰退なのか役割の変化であるのかの択一を避けている。

十四、五世紀西欧における王権と諸身分を国制上に位置づけているのが、朝治啓三「王権と諸身分」である。本章においてはイングランド、フランス、ドイツのみを扱い、それぞれの地域の国家統合の形態が考察されているが、なかでもイングランドの王権と諸身分の関係の検討が詳細に述べられている。

江川温「民族意識の発展」は、エトニとしての民族意識の発展を中世後半の西欧に見ようとするものである。ここでは、言語、共通出自の神話、民族聖人について、中世後期における民族意識が、中世盛期との比較においていかなる地理的広がり和社会的浸透性を持っていたのかを考察している。

田北廣道「都市と農村」は、ドイツを中心として、「中世後期の危機」における都市と農村、中心地論の援用による都市・農村関係、小都市研究の進展による都市発達史上の中世後期の位置づけという三分野の研究動向を概観し、その通説批判の現状とヨーロッパ世界経済の起点としての位置づけを示している。

河原温「都市における貧困と福祉」は、十三世紀からの慈善意識の拡大を背景に、十四世紀の危機後の貧富の分極化の進行による都市の貧困の拡大が、都市貧民救済の担い手の多様化、施設の専門化を招き、さらには国家による社会立法、都市福祉政策が展開されたことを示している。

赤阪俊一「社会的軋轢と抗争」は、十四世紀に頻発した民衆反乱を、都市内対立抗争と農民反乱に分けて、それぞれについて、

独・仏・英・伊各地域からいくつかの例を挙げて詳述し、それらが国家または都市内での地位確保あるいは管理強化の阻止を目的としたものであったことを示す。

渡邊伸「教会と民衆の文化」は、十五世紀シュトラースブルクを例に取り、外面的集団的あるいは内面化した民衆信仰と、それへの教会の対応、信仰への共同体の関与を検討し、中世末期の民衆信仰が教会信仰と対立するものではなかったこと、宗教改革は民衆信仰を外面的にのみ変更したことを示す。

イングランドの法律家ロジャー・タウンゼンドの経歴の詳細な検討をもとに、新井由紀夫「法・法律家と社会」は、ロジャーのノーフォーク州政治社会への治安判事としての政治的進出と、大所領の形成とその維持における法的手腕の利用の実体を示し、そこから中世末期における地域社会と法の関わりを考察する。

大黒俊二「商人と文化——「ことば」をめぐる——」は、「文化」を社会生活で機能する様々な規範の体系としてとらえ、そのなかでも特に「ことば」を足場に、商人の文字・文書利用、商人教育、彼らの用

いたラテン語と俗語を検討することで、商人と文化の関わりを考察する。

最後の章である小山哲「ポーランドと西欧」では、西欧の辺境である「東中欧」の「ヨーロッパ・西欧」における位置づけを、ポーランドを例にとって検討が加えられている。ポーランドはモンゴルの侵入によって西欧世界に「発見」され、十四、五世紀の西欧との交易の拡大によって「現実化」したが、それは同時に西欧への経済的従属の始まりでもあったのである。

終わりに、全巻を通しての感想をいくつか加えさせて頂きたい。まず目につくことは、概説書的な性格の書物としては甚だしく大部であることである。しかもその中で純粹に概説の目的を果たしているのは各巻頭の「概説」部分だけであり、その他の各章は見てきたようにならかなり専門的な内容を示している。それら各章は注釈こそないものの一つの論文といってもよいくらいであり、本書は概説書というよりも論文集と見なしうる書物であるといえよう。そしてそれら「論文」は、初学者にとって決して理解が容易であるとはいえない内容のものである。確かに「概説」の章において参考文

献に外国語文献が記載されていることは、初学者の専門研究への橋渡しとして有益である。しかし全体としてみた場合、初学者にとって個々の専門研究への入り口であるべき各章の難度の高さは、本書が「はしがき」に謳われている基礎知識と専門研究の橋渡しの用に足りうるかという点において、非常に問題であるといえよう。また本書の扱う「西欧」は、「はしがき」において「カトリック圏」と定義されているが、扱われている内容は、英・独・仏に偏っているように感じられる。確かにそれらは編者の専門としている地域であり、またその三地域がいわゆる「西欧」の中央に位置しているのであるから、そのことを一概に非難するべきではないかもしれない。しかし現在、西洋史研究者の研究対象は多様化し、「西欧史」においても一般に「辺境」とみなされてきた地域に対して多く関心が向けられるようになってきている。それらは本書において各巻最終章で扱われているものの各地域における総括的な研究であり、時代的にも内容的にもより個別的な「辺境史」つまり本書の他の各章で扱われているような専門的内容の辺境地域に対する研究が必

要であつたのではないであらうか。

とにかく本書は、専門的な研究書と平易な概説書の二極分化に陥りがちな我が国の西洋中世史関係書籍のなかにあつて、概説書でありながら専門的な内容を持つ各章によって、専門的な論文集としての性格をも持ち合わせているのである。しかし論文的各章の多くは初学者には理解が困難であらう内容であり、それゆえ本書は、その編纂の意図にもかかわらず中世史を始めたばかりの研究者に適しているものではなく、むしろより専門的な研究に従事する者が利用するのにもっとも相応しい書物であるといえよう。そしてそれは、初学者を専門研究へ導くものとはいえないにせよ、ともすれば専門分野に偏りがちな研究者の、西欧中世史に関する知識を広げてくれるのには大いに役立つことであらう。

(A5判 上巻一〇二六六十九頁 中巻一〇二八二一十一頁 下巻一〇三二四十九頁 一九九五年一月 ミネルヴァ書房 各三五〇〇円)

(村瀬直志 京都大学大学院修士課程)